「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた小学校書写学習モデル例

香川県土庄町立豊島小学校 教諭 藤田 剛志

《はじめに》

当然のことながら「学び」の主体は子どもである。では、実現が目指されている「主体的・対話的で深い学び」について、子どもサイドからはどのように表すことができるだろうか。それこそ、子どもに目を向けたとき、「個別最適な学び」や「協働的な学び」の視点から多様な表現が考えられるが、ここでは、小学校書写学習における「学び」として日々教室で展開される子どもの姿を踏まえ、次のように示してみたい。

すべての子どもにとって、わくわく感のある魅力あふれる書写の学び

前段は、インクルーシブ教育の重要性につながるものであり、後段は、目標・評価等の多軸化・多層化構築の必要性である。以下、実践を通して有効性が確認できた「学び」の一端を学習モデル例として紹介する。

《小学校第4学年における学習モデル例》

1 単元名　画の方向クイズを楽しもう「二つの左はらいの方向」

2 子どものわくわく感を高める二つの手立て

日常生活に役立つ知識の習得を目指した学習過程の工夫
「？(はてな)と！(なるほど)の2分法」

学習内容に関わる文字を子どもが探し、それらを二つの群の分類していくことで、「なぜ、そのように分けるのか。」という疑問から、「その秘密（字形の整え方の原理・原則）を見つけたい。」という課題意識が高まるようにする。そのうえで、文字群を対比しながら帰納的に秘密（原理・原則）を発見・納得することで、自分たちが見つけたものとして関係する文字への積極的な活用につながるようにする。

字形の整え方に関する知識を技能として発揮しながら定着を図っていく活動の工夫
◎と△の2択クイズを通した交流活動

子どもが発見・習得した知識（字形の整え方の原理・原則）を技能として発揮する必然性のある場として、◎と△の２択クイズづくりを進める。具体的には、◎の文字として原理・原則に則ったもの、△の文字として則っていないものをそれぞれ書字し、◎を選ばせるクイズとする。そのクイズを子ども同士で出題し合う活動の中で、選んだ文字が◎となる理由を伝える場を設けることで、知識がより確かなものとなるようにする。

3　子どもと文字の関係

日常生活の中で書かれた文字に課題が見られる場合、その課題は、大きく①乱雑、②正しくない、③整っていない の三つに分類できる。そして、それぞれの課題の要因として、①丁寧さに関わる態度、②正しさに関わる認識・知識、③均整さに関わる技能が指摘されることが多い。ただ、③については、分析不足の面もある。それは、均整さに関わる知識に着目してこなかった点である。そのため、課題解決への方策として、技能の習得を目指したいわゆる練習が重視され、「どのように書けばよいか」という知識が軽視されてきたといえる。本単元の学習内容は上記③に関連し、主たる対象文字は次のようになる。

【表１】本単元の学習対象となる配当漢字

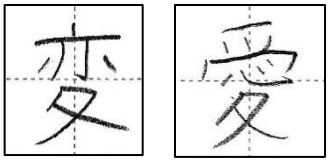
配当学年	１年	２年	３年	４年
A類	夕 名	家　外　角　顔　形 後　行　場　色　多 冬　夜	客　祭　死　終　湯 負　物　勉　役　陽 落　列　路	各　径　察　参　残 争　隊　徒　徳　例
B類		夏　後　麦　友	級　反　坂　板　返 （波）（皮）	愛　媛　阪　飯　変

A、Bの２類型に分けたのは、並列関係にある左払いが【表２】のようになっているからである。

【表２】並列関係にある左払いの分析表（字形の整え方の原理・原則）

	終筆の位置	並び方	長さ	間隔	終筆の方向
A類	文字の左側など	上下（縦並び）など	先に書く左払い→短め	徐々に広くなる せまくならない	後に書く左払い→（先に書いた左払いに）近づけない、広げる
B類	文字の下部	左右（横並び）	先に書く左払い→長め	徐々にせまくなる	後に書く左払い→（先に書いた左払いに）近づける

国語科において新出漢字を学習していく際、子どもたちはA、Bに分類できることを知らない。保護者世代も知らない。整えて書くための手がかりにしてきたのは、活字や手書きの手本であり、それを模倣する作業としての練習を続けてきた。結果、子どもたちは対象漢字を【図１】のように書く場合が多い。これらには、上記③整っていないという課題がある。ただ、その課題が生じた要因は、【表２】の知識がなかったからといえ、字形の整え方の原理・原則を知ることによって、課題は容易に解決するだろう。しかも、【表１】掲げたように、文字全般に活用することができる。これを日常生活に役立つ知識と捉えたい。保護者世代も知らないことという意味では、このような原理・原則を知識として身に付けることは書写における「深い学び」と呼ぶことができるかもしれない。



【図1】子どもの書字例

４　子どもの「学び」の展開

ここで、書写における「主体的・対話的で深い学び」について、どのように捉えているか、また、それぞれ実現の可能性を感じることができた活動場面を（　　）内に示す。

「主体的な学び」

書写（の学習内容）を学ぶことに興味や関心をもち、日常生活及び生涯にわたる書字活動を見通しながら、自己の学習活動を振り返って次につないでいく学び（与えられた教材文字よりも子ども個々に関連がある文字を扱う場面）

「対話的な学び」

子ども同士の協働を中心に、自分たちで文字の整え方の原理・原則等書字活動に関わる考えを広げ深めていく学び（書かれた文字から課題を見つけるよりも、原理・原則を発見する場面）

「深い学び」

習得・活用・探究（発見・納得・活用）という学びの過程の中で、書写の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、 問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かっていく学び（原理・原則を「なるほど」と理解し、それを生かしながら書く場面）

以下、教科書に示された学習過程等を検討しながら、指導上の工夫について述べていく。

日常生活に役立つ知識の習得を目指した学習過程の工夫
「？（はてな）と！（なるほど）の２分法」

○教材（文字）から学習材（文字）へ

本単元では、「友（夏・麦・冬・名）」が教材文字として教科書に示されている。ただ、子どもたちとこれらの文字との間にどのような関係性があるのかについては不明である。そこで、少しでもつながりを感じることができるように、学習材となる文字を子どもたち一人一人が探し、集めるようにする。最も関わりが深いのは、やはり氏名や住所に含まれる文字であろう。少なくとも「自分が発表した漢字」という関係性のある学習材を扱うことで、「主体的な学び」となるようにする。

○はてな（？）を生む仕掛けと対比的な思考及び帰納的な流れによる原理・原則の発見

子どもが探し出した文字を、学習指導者がＡとＢの二つの文字群に分けていくことで、自然な形で対比的な思考と分類の基準としての原理・原則の発見につながるようにする。原理・原則というからには汎用性があることが大前提であり、子どもとの関係性を大切にする意図から、子どもと同数程度の文字数を取り上げ、そこから帰納的に発見していく過程が望ましいと考える。翻って、原理・原則に則って整えることができる文字数も多くなり、文字通り日常生活に役立つ知識となろう。

○協働的、対話的に原理・原則を発見していくための支援

原理・原則を子ども自身が発見する活動を重視するのは、それによって、「はてな（？）を自分（たち）で解決することができた。」という喜びや達成感、充実感を味わうことにつながるからとも言える。ただ、限られた子どもだけになり周囲の子どもが傍観者的な立場に留まらないような支援が求められる。これまでは、ペアやグループ内での対話を通して見つける活動が展開されてきたが、加えて、先の【表２】に示しているように、多角的な視点から言語化することができるように配慮する。教科書では、「終筆の位置」と「終筆の方向」の二つの視点からまとめられている。本単元では、これに加え、「並び方」「長さ」「間隔」の視点から原理・原則を具体化する。このことにより、「分かった。」と発見することができる子どもも増え、なるほど（！）と納得する度合いも高まるであろう。なお、これらの視点は、教科の特質に応じた「見方・考え方」につながるものであり、「深い学び」の実現及び今後の書写学習においても有効に働くといえる。

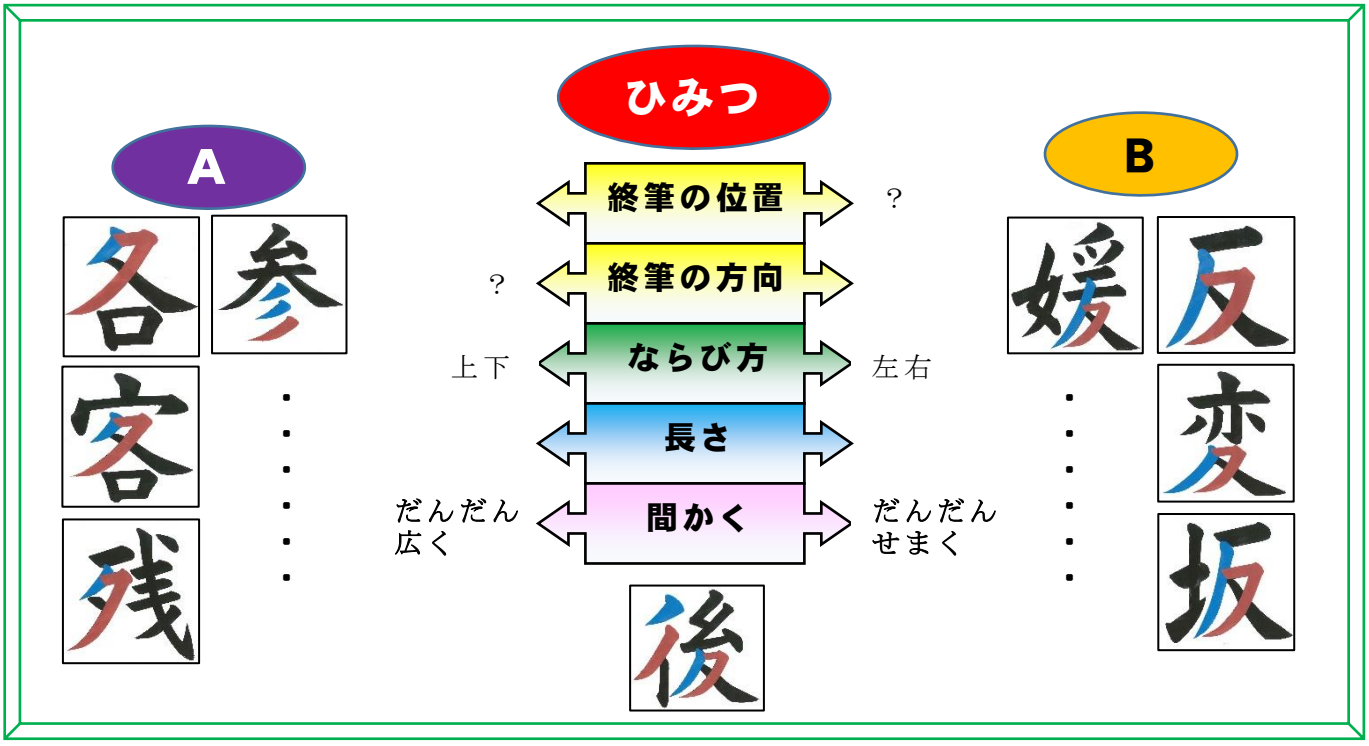
○構造的な板書による原理・原則を発見していくための支援

《学習課題をつくる場面》

・子どもが探した対象漢字を左右に分けて板書することで、対比しやすくする。
・後半は「AとBのどっちだと思う？」などと予想を含めて漢字を発表するように促す。

《学習課題の解決に向け、思考する場面》

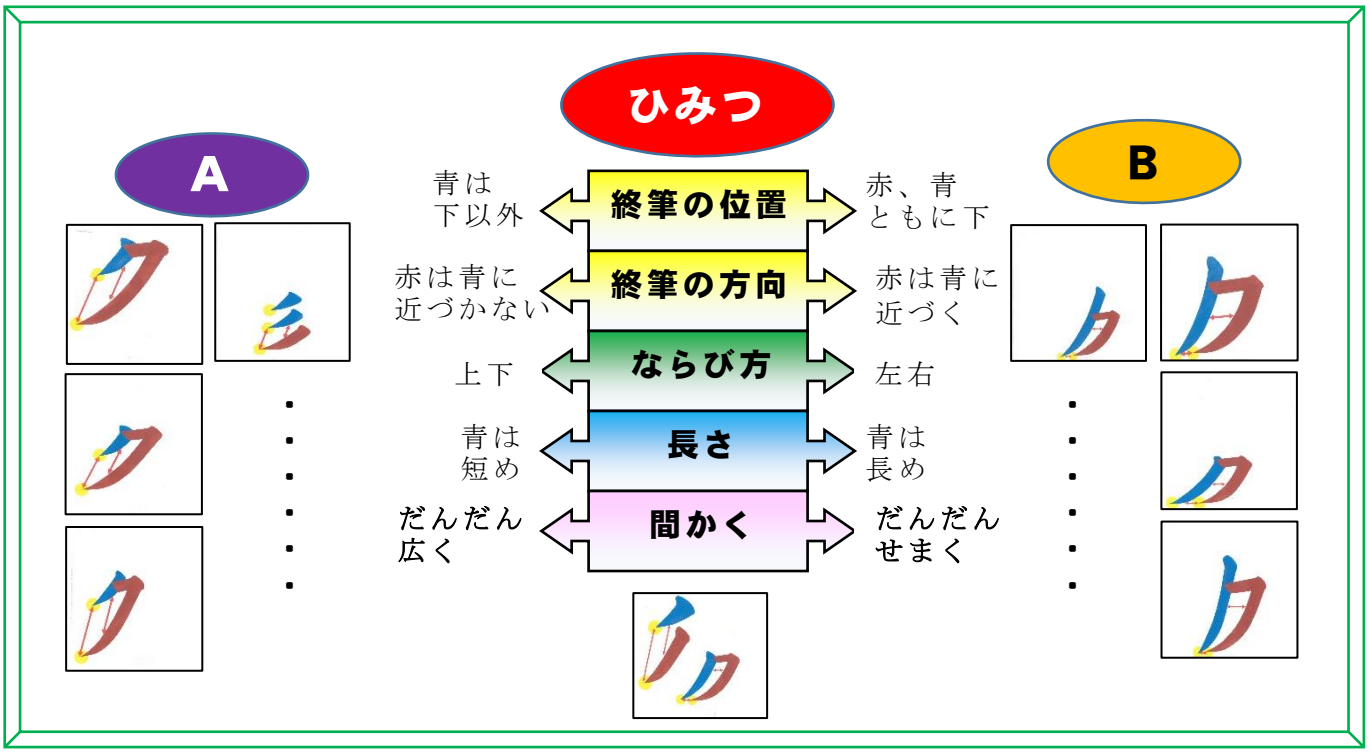
・二つの左払いに着目しやすいように、赤青など色をつけた漢字カードを板書する。
・【表２】に示した対比の視点を適宜掲示していく。



【図２】板書例①

○焦点化による原理・原則を発見していくための支援

漢字カードの裏面は、それぞれの漢字の二つの左払いのみを示し適宜提示していくことで、より多くの子どもが視点に沿って発見しやすいように配慮する。



【図２】板書例②

このような学習過程について、子どもたちは次のように振り返っている。

・AとBのちがいは何かを考えるのがとてもおもしろかったです。ぼくは思いました。見るだけじゃなくて考えてみればいろんなことがわかるんだなと思いました。

・AとBに分けたときに調べたら、「これもそうだな」と思いつかない漢字も分かりました。それに、友達が言ったいけんを聞いて「たしかに」と思うことがあって、自分では考えのつかないことを知って、とても楽しく勉強ができてよかったと思いました。

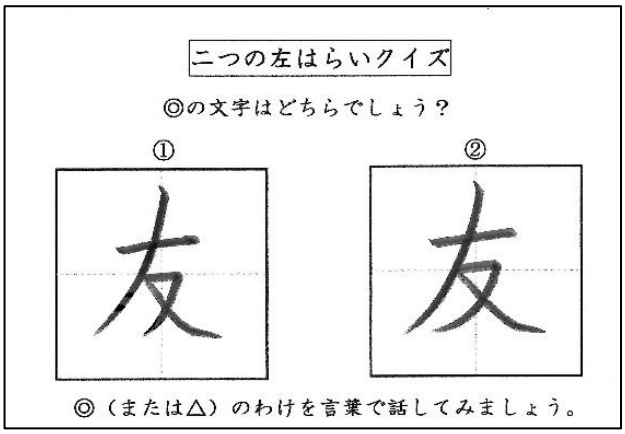
・自分の名前がAかBかわかってよかったです。こんどもしてみたいです。

・自分の名前（後○）に、みんなが感心してくれて、何かうれしくなりました。

字形の整え方に関する知識を技能として発揮しながら定着を図っていく活動の工夫
◎と△の２択クイズを通した交流活動

○子ども自らが知識を「活用・発揮」できる授業を展開するために

子どもたちが「字形を整えて文字を書こう。」とする背景には、どのような思いがあるのだろう。周囲の大人や友達から「上手だね。」「きれいだね。」などと認められたい側面もあるだろう。このような向上心も大切にしつつ、「自分が見つけた秘密だからこそ書くときに使ってみたい。」という活用への意欲も高まるようにしたい。その一つがクイズづくりであり、出題者として知識を「活用・発揮」するための「仕掛け」ともいえる。本単元においては、右図カードのようなクイズ問題を作成する活動を進める。ここでは、相手意識をもちながら◎と△の文字を意図的に書き分けるところがポイントとなっている。



一方、回答者となった場合でも、知識を「活用・発揮」する場がある。原理・原則に則って◎の文字を選ぶことに加え、その理由を述べることが求められるのである。このように、両者の立場から知識を「活用・発揮」する機会があることが、クイズづくりの大きな利点であろう。１対１で口頭にて回答する形態をとった場合、子どもにとっては、最大自分以外の子どもと同数のクイズに向き合い、知識を「活用・発揮」する機会を得ることになる。生きて働く知識として定着することを期待するゆえんである。

○価値ある交流活動を促すコーディネート

クイズを媒介にした交流活動は、知識を「活用・発揮」できる場をふんだんに設けることができるからこそ展開するものである。ただ、出題者がクイズづくりを進める際に◎と△を区別できないような文字を書いていたり、回答者が述べる理由の適否を判断できなかったりすると、活動自体が混乱し、停滞してしまう。これを防ぐため、交流活動前に適切なクイズになっているかどうか確認し合う場を設ける。◎の理由についても、クイズ用紙の裏面に模範的な文例を記述しておくことも助言したい。また、ペアが組みやすいように、交流順序についても配慮する。例えば、子どもたち自身が名簿をもち、出席番号１の子どもは順に番号 14、15、…と、そして、出席番号２は 15、16、…と順次相手を変えていくという具合である。学習指導者は、理由を伝えにくい子どもを中心に、適宜個別にサポートしていく。

5　本時の学習展開

(1) 目標

・並列関係にある左払いの方向に関わる文字群の対比を通して、整え方の原理・原則を発見し、クイズの作成や回答に生かすことができる。

・並列関係にある左払いの方向に関わる原理・原則に則って、２択クイズの選択肢となる◎や△の文字を硬筆で書き分けることができる。

(2) 学習指導過程

学習活動	子どもの意識の流れ	学 習 指 導 者 の 支 援
1　左払いの点画を確かめ、該当する漢字を集める。 2　二つの文字群に分類されていくことから問いをもち、解決に向けた学習課題をつかむ。 3　対比等の分析を進めながら文字群の特徴を捉え、原理・原則を見つける。 4　左払いの方向に関する２択クイズを楽しむ。 (1)　◎と△の文字を硬筆で書き、クイズを作成する。 (2)　クイズを出題し合い、選択理由も含めて回答していく。 5　本時を振り返り、次時への見通しをもつ。	左払いはこのような画だったよね。 筆順を続けて（並べて）書く左払いのある漢字を集めよう。 A 夕　名　家　外　角　顔　形 後　行　場　色　多　冬　夜 各　客　参　… B 夏　後　麦　友　級　反 坂　板　返　愛　媛　阪 飯　変　優　… A、B の漢字を整えて書くときの「ひみつ」を見つけ、 それを使ったクイズを楽しもう。 《対比の視点》…終筆の位置・終筆の方向・並び方・長さ・間隔 A’ 左払いの終筆が文字の下の方になく、上下に並ぶときは、間がだんだん広くなるように離していく。 B’ 左払いの終筆が文字の下にあって、左右に並ぶときは、間がだんだんせまくなるように近づけていく。 A、B の漢字から選んで、「左払いの方向クイズ」を作ろう。 ◎と△を書き分けて、◎の理由を言葉でまとめよう。 とっておきのクイズが完成したよ。さあクイズ大会のスタートだ。 ◎の漢字を選んで理由も伝え、クイズの点数を増やしていこう。 「ひみつ」を使えば、簡単に◎の文字を書いたり見つけたりできるから、いろいろな漢字のクイズを楽しむことができるね。 毛筆で漢字を書いて、たくさんの人が楽しめるクイズを作ろう。	・様々な方向及び折れのある左払いを板書し、名称と形状を確認することで、学習対象となる漢字をスムーズに集めることができるようにする。その際、終筆を止めた例も含めることで、後に終筆部分に着目することへの布石とする。 ・１～４年の配当漢字一覧表及び名簿を資料として配布し、対象漢字を集めやすくする。 ・子ども一人一人と関わりのある漢字になるように、全員が発表する機会を設ける。 ・準備しておいた漢字カードを A 類は黒板左側、B 類は右側に分類しながら板書する。なお、「後」は双方に属するので中央に位置付ける。 ・漢字カードの左払い部分には、あらかじめ青や赤で着色しておき、黒板上で対比しやすいようにする。 (語) 原理・原則に関わる発言の状況によっては、座席列ごとの５グループが、五つの対比の視点を分担して分析を進めるようにする。（語り合いの焦点化） ・原理・原則を一文にまとめる際も、A’と B’を対比的な見方で考えられるように、教師が意図的に間違える場面も用意しておく。 ・クイズにする漢字の選択は任意とするが、子どもの氏名の漢字は、本人に声をかけて選ぶことを促す。 ・クイズを１問作成することができたら、グループ内で確認し合ったり、遅れている子をサポートしたりするように助言する。 ・クイズを出題し合うペアを効率よく組むことができるように、名簿兼得点表の用紙を活用しながら、固定席グループと移動グループに分けて活動を進めていく。 　交流の様子を見守りながら、回答しにくいようなら子どもへ個別にサポート(評)する。（行動観察） (評) ３枚の振り返りカードを提示し、観点にそって本時のまとめにつながるようにする。（文章記述、発表） ・硬筆によるクイズでは、掲示して多くの人が楽しみにくいことを確認し、毛筆の必要性に気付くようにする。

《おわりに》

今回紹介した学習モデル例は１学年１単元によるものだが、「？（はてな）と！（なるほど）の２分法」においても、「◎と△の２択クイズを通した交流活動」においても、幅広い学年、単元において導入・展開することができるものである。すでに、数々の実践を通して、その有効性が確認されるとともに、各教室において、子どもたちの実態に応じたアレンジを進め、改善も図られてきている。できれば、書写において、このような実践的な研究がより多くの教室に広がり、それこそ、本稿冒頭に掲げた次のような「学び」を楽しむ子どもたちが増えていくことを期待してやまない。

すべての子どもにとって、わくわく感のある魅力あふれる書写の学び